

回貂の書

第一集



原野 雷曲





回貂の書

第一集

画・原野雷曲



青鷺火	火鼠	狽	蟠竜	逆鱗	狂骨	石羊	野狐	きつねの窓	しっぺい太郎	狗賓	送り犬	木霊	ぬりかべ	狢子	目次
-----	----	---	----	----	----	----	----	-------	--------	----	-----	----	------	----	----

ぬりかべ

道を歩いていると突然壁のようなものに体が当たり、前へ進めなくなる。なにか通行の邪魔をしている物があるのかと目を凝らしてみても、遮るものを確認することは出来ない。そんな人の通行を壁のようになって邪魔する妖怪のことをぬりかべという。漢字で書く場合は塗り壁、塗壁と記す。人の通る道に出没し、多くの場合に不可視であるという。その正体は貉とも鼬や狸の類が化けたものと考えられた。道を塞がれて困った時は、下の方を棒などで払うと壁が無くなり進めるようになるというが、上の方は叩こうが喚こうがどうしようもないと聞くので重点的に下を攻めたいものだ。不可視であるため対処がやり難くぬりかべが消えるまでは足止めされることになるので、夜の帰宅途中へとへとになっている時や、時間に追われて急いでいる時には出会いたくない妖怪である。





木霊^{こだま}

樹木の精霊、或いは神、妖怪を木霊と呼ぶ。他の字に古太萬や木魂、木魅の他に樹神と字を書く、いずれもコダマ、コタマ読みをする。妖怪の山彦や山鬼と同一視される他、人の姿や動物の姿に化けて出ると考えられた。その本性は実体ある樹木であり、年老いた古木には特に木霊がいるとされた。中でも尋常でない巨木は山の主や神に見られて信仰を得て祀られる事もある。江戸時代の絵師鳥山石燕による木魅の紹介では百年を経た樹が神を宿すようになるで紹介されており、木霊の年齢は百年単位に考えられている。日本の民話では伐り倒せない不思議な大木の話や、血の出る木の伝承が全国各地に数多く残り、これらは木霊の仕業にされる事も多い。山での不可解な現象にしばしば結び付けられる為に不気味な印象も持たれるが、その実体の偉容に敬意を抱かれる事も多い不思議な妖怪といえる。



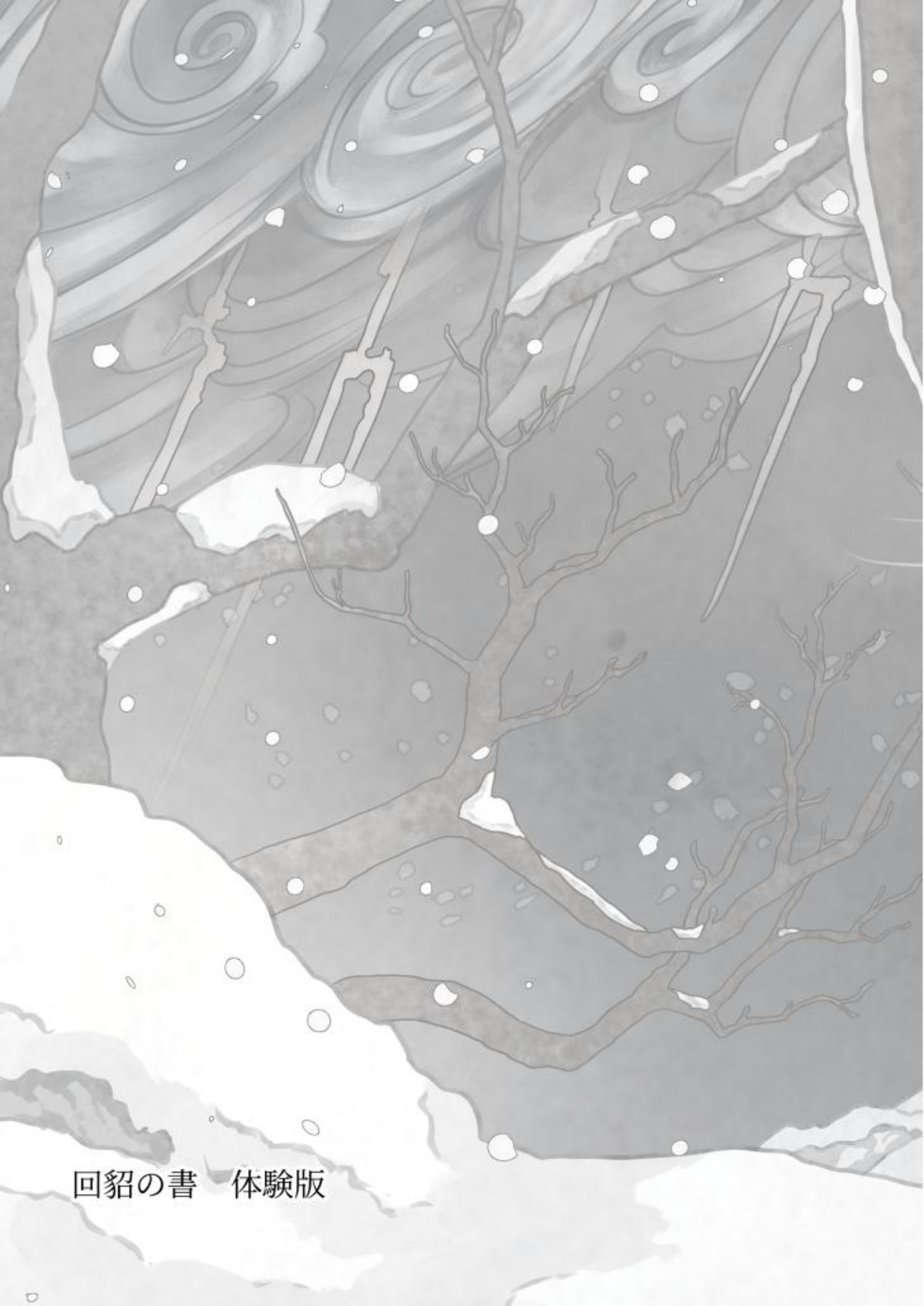
ヤマビコも
仲間だよ！



送り犬おくいぬ

山道を歩くと、木々の間に見え隠れする影がある。それは道行く人の前になり後ろになり付かず離れず追いかけてくる。どうやらそれは犬に似た姿をして、こちらの様子を窺うようであった。ある者はこれを山の神の加護として喜び、またある者は身の毛のよだつ思いでそれに襲われ^{おそ}られないよう注意を払ったという。その妖獣の正体は山犬と呼ばれる生き物であり、特に道行く人につく者を送り犬と呼称した。別名には送り狼があり、こちらの呼び方の場合はその危険性を強調される事がある。送り狼は猪などの獣害を避けて、道行く人を加護する面を持つが、人が隙^{すき}を作って転ぶなどした場合、たちまち襲いかかって食べてしまうとも言われていた。この事から送り狼という言葉に女人に親切を装い近づき道行きを同伴するも、隙あらば襲いかかる悪い男の意味を付加する場合があるようだ。山で送り犬に会う事のない昨今、もしかしたらこちらの言葉の意味で知られる事の方が多くなっているかもしれない。そうした怖い側面もあるが、送ってもらったお礼に送り犬に草履^{ぞうり}を投げてみると、喜んで啜^{すす}えて持って帰るといった人と山犬双方にどこことなく気の弛^{ゆる}さが感じられる話もある。





回貂の書 体験版

